The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	南方熊楠の思想におけるH.スペンサーの影響について：土宜法竜往復書簡に見える因果論を中心に
Author(s)	Szalay, Peter
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53889
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　Szalay Peter　）	
論文題名	南方熊楠の思想における H.スペンサーの影響について —土宜法竜往復書簡に見える因果論を中心に—

論文内容の要旨

本論では、1980 年代以降に思想家としても注目されている民俗学者、南方熊楠(1867～1941)の思想における H.スペンサー（Herbert Spencer, 1820~1903）の影響について論じた。先行研究において、遊学時代(1887～1900 年)に西洋の近代科学思想を吸収した南方は、西洋起源の科学思想に飽き足らず、これを援用しつつ東洋的、つまり大乗仏教の思想と融合させて新しい思想レベルに到達するに至った、と述べられている。この過程で、スペンサーは南方に一定の影響を与えたとされるが、その影響は徐々に弱まり、ついに遊学時代の後半（1893～1900 年）で南方はスペンサーと決別してしまったとされている。

先行研究の成果がこのように判断する主な根拠は、真言宗の僧侶である土宜法竜(1854～1922）との往復書簡であった。つまり、南方は本書簡において、スペンサーを批判する一方、多くの仏教用語を用いて大乗仏教の可能性を語ったとされているのである。

筆者は本研究において、①土宜との往復書簡の資料的位置づけに問題があった、なぜなら、僧侶である相手に向けて南方は仏教用語を用いて議論・説明するのは当然であり、②むしろ、これまで否定されてきたスペンサーに代表される近代科学思想の影響が大きいのではないか、という二つの問題を提示した。

筆者は土宜との往復書簡とともに南方熊楠顕彰館と南方熊楠記念館の両施設で保管されている南方の自筆資料と書物の調査を行った。これらの資料に基づき、東京大学予備門に通っていた南方が、『東洋学芸雑誌』、*Rōmaji Zasshi* と E.S.モース（Edward Sylvester Morse, 1838~1925）の『動物進化論』を読み、そこからスペンサーについて一人の日本人知識人として身に付けるべき情報を得たと述べた。さらに、アメリカの *The Popular Science Monthly* 誌を通して、南方はスペンサー的な考え、特に近代科学と宗教の対立について多く学んだ、と拙論の前半で論じた。第 4 章で、南方がキリスト教を好まなかった理由を M.モニエル＝ウィリアムズ（Monier Monier-Williams, 1819~1899）著 *Buddhism* を中心に考察した。その理由とは、一言で言えば、キリスト教の「神意説」を南方がどうしても受け入れることができなかったことである。なぜなら、彼は一人の科学者として因果律を追求することを自分の任務と考えたからである。第 4 章は南方研究におけるキリスト教関連の最初の実証的な考察である。

第 5 章ではスペンサーの思想に関する説明、つまり、スペンサーにとって人間には解明できない「不可知」(Unknowable)の議論はいかに重要であったかを論じた。第 6 章では土宜との往復書簡に見られる南方の科学、宗教と因果律に関する議論はスペンサーの見解と異同か、検討した。スペンサーは科学の最重要性を訴えたが、科学的事実はあくまでも相対的であると述べた。なぜなら、「第一原因」となる「不可知」は絶対的で、完璧で、因果律と時間、空間を越えたものであるからである。人間は「不可知」を全く把握できないが、合理的に考えるとそれを実在するものとして認めざるを得ない。「不可知」を科学は解明できないため、この究極の神秘については宗教に任せるしかない。他方、「不可知」の存在さえ認めてしまえば、それ以外の事象は全て合理的に説明できる、と述べた。

南方が土宜に向かって繰り返して述べた議論は、スペンサーの議論と説明の仕方が多少異なるものの、ほぼ同じであることを本研究で明らかにした。近代科学思想の絶大な影響を受けた南方は土宜宛書簡ではただ「不可知」を「大日」と置き換えたのである。南方は先行研究で指摘されているように、確かにスペンサーの進化論について全面的に賛成していたわけではない。しかし、南方はスペンサー著 *First Principles* の前半、「不可知」（“The Unknowable”）で展開された議論に大きく影響されたこと、そして、スペンサーのこのような影響が土宜宛書簡では、1904 年までは確実に見られるということを本研究で明らかにした。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（Szalay Peter　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	嶋本隆光
	副 査　教授	加藤　均
	副 査　准教授	五之冶昌比呂
	副 査　准教授	柴田芳成
	副 査　准教授	佐野方郁

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果は以下のとおりである。

1980年代以降、南方熊楠研究は主として熊楠の仏教とのかかわりを軸に進められてきた。「南方マンダラ」は最もよく知られている。主として用いられた資料は熊楠と真言宗僧侶、土宜法竜との間に交わされた膨大な量の書簡であった。この傾向に対して、氏の論考は同資料を精査したうえで、①　これまでの資料の用い方に問題点がなかったか、なぜなら、上記の傾向が形成されたのは書簡の相手が仏教の僧侶であったため仏教の用語を用いて議論がなされるのは当然であり、②　むしろ先行研究で早々に否定されたスペンサーを代表とするヨーロッパ思想家の影響は、熊楠が帰国した後、少なくとも1904～5年ごろまで強くみられるのではないか、の2点を問題点として提示した。

以上を証明する前提作業として、①　熊楠と進化論との最初期のかかわり（東京大学予備門時代）の調査、②　アメリカ滞在時代に多大な影響を受けたと考えられる雑誌、Popular Science Monthlyと熊楠の関係についての調査を行い、主要な掲載論文（多くのスペンサー自身の論文を含む）を検討・分析した。③　科学的合理主義の精神旺盛な熊楠の宗教に対する立場を明瞭にするために、当時強い影響力を持っていたキリスト教宣教師、M・ウィリアムスの著作 Buddhismを検討し、上記書簡の関連個所と対照しながら、熊楠がキリスト教的「神意説」を嫌った事実を明らかにした。（熊楠とキリスト教の関係を扱った論考は本邦では本論考が最初であり、熊楠研究者の注目を引いた。氏は平成26年夏、依頼を受けて同テーマに関して和歌山県紀伊田辺で発表を行っている。

以上の前提的考察を踏まえたうえで、論文の核心部分である第5章と6章で、①　因果論を中心にスペンサーの思想の検討、②　書簡に見える熊楠の見解との異同について綿密な調査・検討をおこなっている。特に重点が置かれた点は、スペンサーのFirst Principlesにみられる「不可知 unknowable」の考えである。先行研究では、熊楠がある時点で記した「スペンサー批判」をそのまま受け取り、スペンサーと「絶縁」したように解釈するが、サライ氏の調査では、実は全くそうではなく、日本へ帰国後の熊楠はスペンサーの考えを、全面的にとは言えないものの、依然として受け継いでいる点を実証した。つまり、スペンサーにとって「不可知」を認めることは、多くの批判にもかかわらず、因果の鎖が際限なく続くことを回避するうえで必要であった。むしろ、知識の最前線にいる科学者こそ「不可知」を認める必要がある点を強調する。サライ氏は、このスペンサーの立場は熊楠が「不可知」を「大日」と置き換えただけで、説明方法の異同はあるものの、ほぼ同じことを述べている点を指摘している。

以上のサライ氏の論旨と実証結果はきわめて説得力のあるものであり、これまでの熊楠研究に新たな視点を提供するものである（8月初旬紀伊田辺で発表予定）。

以上から、博士論文審査委員は全員一致で、サライ・ペーテル氏の論文は日本語・日本文化の学位を授与するにふさわしいものと判断した。